

ハ太刀ヲ拔合セテ名乗ケリ、和君ハ誰、菊池三郎高望ゾ、和君ハ誰ゾ、梶原源太景季ト名對面シテ切合タリ、源太ハ甲ヲ被打落、大童ニテ三十餘騎ニ被取籠テ切合ケルガ、菊池三郎ニ押並テ引組テ、馬ノ際ニ落重テ、菊池ガ頸ヲ取、太刀ノ切鋒ニ指貫テ、馬ニ乗出ケルガ、父ノ梶原ニ行合タリ、平三景時源太ヲ後ニ成テ、矢面ニス、ミ禦戰ツ、其間ニ源太ニ鎧キセ、暫休メテ寄ツ返ツ戰ケリ、城戸口ニ眞鍋四郎五郎ト名乗テ出合タリケルガ、四郎ハ梶原ニ討レヌ、五郎ハ手負テ引退ク、平家ノ兵共モ、入替入替戰ケレ共、景時ハ源太ガ死ナヌ嬉サニ、猛ク勇テ堅サマ横サマ戰ケリ、暫シ息ヲモ繼ケレバ、父子相具シテ引テ、城戸ヘゾ出ニケル、サテコソ梶原ガ生田森ノ二度ノ蒐トハイハレケレ、

〔平家物語 十一〕弓ながしの事

平家はをほいなしとや思ひけん、弓もつて一人、たてついで一人、長刀持て一人、武者三人、渚に上り、源氏こゝをよせよやとぞまねきける、判官源義經安からぬ事也、馬づよならん若たう共、はせよつて、けちらせと宣へば、むさしの國の住人みをのやの十郎、同じ四郎、同じ藤七、上野國の住人丹生の四郎、信濃國の住人きその中次、五きつれて、おめいてかく、中略たてのかけより、大長刀打ふつてかゝりければ、みをのやの十郎、小太刀大長刀にかなはじとや思ひけん、かいふいてにげければ、やがてつゝいて追かけたり、長刀にてながんずるかとみる所に、さはなくして、長刀をば、弓手のわきにかいはさみ、めての手をさしのべて、みをのやの十郎が、甲のまころをつかまうとす、つかまれじとにぐる、三度つかみはづいて、四度のたびにむすとつかむ、まばしぞたまつてみえし、はち付の板よりふつと引きつてぞにげたりける、中略其後甲のまころをば、長刀の先につらぬき、高くさし上、大音聲をあげて、遠からん者は音にも聞、ちかくはめにも見給へ、是社京童べのよぶなる、かづきの悪七兵衛、かげ清よとなのりすて、みかたのたてのかけへぞのきにける、中略